

沖縄県の図書館にまつわる書評

奥野宣之著『図書館超活用術』

「第8回としょかんまつり in 沖縄県立図書館」講演会の報告も。

山口 真也

2016年11月5日、沖縄県立図書館において「第8回 としょかんまつり」が開催されました。午前中から、県内の読書団体の表彰式や、ビブリオバトルのセミナー、図書館見学ツアー、図書館バッグづくりのワークショップなど、盛りだくさんのイベントが開催されましたが、メインイベントの1つとして開催されたのが、作家・奥野宣之さんによる、「もっと使える！図書館『超』活用術」と題する講演会でした。

奥野さんというと、シリーズ累計10万部を超えるベストセラーになった『情報は1冊のノートにまとめなさい』シリーズでも有名です。昨年も、秋に開催された「浦添市立図書館読書講演会」の講師として来沖されていたそうですが、あいにく仕事の都合で参加できませんでした。そんな奥野さんが、今年の春、『図書館〇超活用術—最高の「知的空間」で、本物の思考力を身につける』という「図書館本」を朝日新聞出版より出版され、再度、来沖していただけることになりました。

私と『図書館〇超活用術』との出会いは、宜野湾市民図書館の新刊コーナーでした。まずタイトルとカッコいい装丁に惹かれて、ぱらぱらとめくっていたところ、本の後半の「図書館のトリセツ」という章の中の、「プライバシーが守られる 監視社会でも自由を確保できる」という記事がとても興味深くて、制限冊数いっぱい借りていた他の本を返却して、この本を借りたのを覚えています。

「リンゼイ・アン・ホーカー殺害事件の容疑者・市橋達也は、自宅に捜査員がやってき

たとき、はだしのまま自宅を飛び出し、2年7か月もの間、逃亡を続け」ますが、「逃亡のための交通手段を調べたり、潜伏先の島でのサバイバル生活をするための情報集め」の場として、彼が何度も使ったのが図書館だったと

紹介されています（pp.170-172）。いまは町中には監視カメラが何台もありますし、携帯電話でネットにアクセスしたら、どんなところからどんな情報を解析されるか分かりません。彼の逃亡行為そのものを肯定するつもりはありませんが、図書館のプライバシー保護の基本姿勢が興味深い事例をつかってとても分かりやすく説明されている点にぐっと引き込まれました。



序文によると、この本を書くために、奥野さんは桃山学院大学の講習に通って、司書資格を取得されたそうです。曲がりなりにも国家資格。実は私も大学院時代に講習で資格を取得しましたが、朝から晩まで休みもほとんどなく2か月近く勉強するというあまりのハードさに、「人生で二度とやりたくないことベストテン」の2位くらいの出来事です（1位は教育実習）。図書館の「外」の人が書いた図書館本はここ数年で何冊か出版されて、ベストセラーになったものもありますが、資格を取得した上で書かれているものはこの本が初めてではないかと思ひますし、先のプラ

イバシーに関することも含めて、図書館学の基礎がきちんと抑えられている、と感じたことが、なるほど、と序文を読んで鮮やかにつながりました。

講演会の内容については、本書をもとに、一般の方向けに図書館を使い倒すにはどうすればいいか、そもそもなぜ図書館を使った方がよいのか、という話が印象に残っています。確かに周りを見渡せば、「調べものはネットで十分」と思っている人ばかり。大学で接している学生たちもそうですし、私自身もちょっとしたことは図書館に行かずにネットで調べます。そんな時代だからこそその図書館の必要性とはなにか。詳しくは本書を読んでいただくとして、1点だけここで取り上げるとすると、それは「ネットで見つけられる情報はみんな見ている」「図書館で探した情報は自分だけの情報」ということ。それは、奥野さんが生きている「ビジネス」の場面でも同様なのだそうです。ネットで簡単に得られるアイディアは、おそらくもう誰かが試していたり、試したけど失敗したことだと思った方がいい。奥野さんは、図書館の棚を見ただけでもいろいろな発見があると語ります。ふだん誰も入らないような書庫に足を踏み入れればなおのこと、誰もまだ気づいていない仕事のアイディアが見つかるそうです。

確かにネットでは調べたいことをキーワードにして入力し、検索ボタンを押して、一番上に出てくるサイトを見るだけでたいいの調べものが終わってしまいます。調べたいことに一直線です。図書館では、調べたいことまでたどり着く過程で、1冊の本からその隣の本、またその隣の本、と様々な寄り道があります。道のりは100人いれば100通り。だからこそ、オリジナリティのあるアイディアが生まれるのでしょうか。



図書館界に「ビジネス支援」という言葉が出てきてもうかなりの時間が経ちましたが、ネットはなぜダメなのか（不十分なのか）、なぜ図書館に来てほしいのか——。民間企業でのビジネスの経験がないため、実感を持って語ることが難しいと思っている図書館員は案外多いのではないのでしょうか。かくいう私も、民間企業でバリバリと働いたことはなく、学生たちにビジネスシーンでのニーズを伝えるのが難しいなあといつも感じていました。もちろん、ビジネス支援について書かれている専門書はありますが、質問事例が出てくるだけのものが多く、いまいちビジネスマンが図書館になにを求めているのか、ピンときていませんでした。本書は、仕事をする人はこんなふうには図書館を活用している、ということをつかりやすく伝えてくれる一冊です。学生にもぜひ読んでほしいですし、県内の図書館の皆さんにもおすすめします。

講演会終了後の懇親会の席に図々しく参加して、奥野さんと少しお話をしたところ、「この本は私の代表作になる予定」ということでした。「図書館のことはこの1冊で終わり」という話もされていたのですが、そんなことはおっしゃらずに、2冊目、3冊目も期待しています。

やまぐち しんや：沖縄国際大学